

## グリフィスと齋藤修一郎—グリフィス東京日記とグリフィスの修一郎評価を中心として—

2014年10月19日 日本英学史学会福井大会 於：福井大学  
本学会会員 川瀬健一

はじめに：

福井藩藩校明新館の理学教師を務めていたグリフィス William Elliot Griffis (1843-1928) は、1872年1月23日(明治4年12月4日)に福井を発って東京に向かった。東京の南校の理学・化学教師となったからである。そして翌2月に南校に着任し、以後学校はその体制をしばしば変更し、校名も南校⇒第一番中学⇒開成学校と変わったが、グリフィスは1874(明治7)年7月に開成学校を退任して18日に帰国の途に就くまでここで理学・化学を中心として、語学や歴史学など多彩な科目で生徒に関わり、彼らの教育にあたった。この東京におけるグリフィスの生徒の中に、私の母方の曾祖父・齋藤修一郎(1855-1910)もいた。齋藤は1870年の11月(明治3年10月)に福井藩の貢進生として大学南校(後南校)に移り、1875(明治8)年8月にアメリカに留学するまでここで学んでいた。

東京におけるグリフィスの教え子の多くは、その後の明治国家建設の最前線を担う俊才ぞろいであるが、彼ら一人一人についてのグリフィスの評価はほとんど残されていない。唯一グリフィスによるその人物評価が公刊されたのは、後に外務大臣となり、日英同盟締結や日露講和条約締結などで活躍した小村寿太郎(1855-1911)だけである。これは小村がポーツマスでの講和会議の日本側全権となった際に、グリフィスがニューヨークタイムズに文章を寄せたからである(「Komura as a Former Teacher, Dr. Griffis, Knew Him」*The New York Times* July 30, 1905)<sup>1</sup>。

一方、齋藤修一郎はイギリス人の作家エドワード・グリー Edward Greer (1836-1888) との共著『*The Loyal Ronins*』『忠義浪人』(G. P. Putnam's Sons, New York, 1880)で多少知られた存在であったとはいえ、小村のように華々しい活躍を示した人物ではないので、齋藤についてのグリフィスによる人物評は公刊されていないが、齋藤が1895(明治28)年4月に朝鮮のソウルからグリフィスに宛てて送った齋藤の写真<sup>2</sup>の裏にグリフィスの齋藤評がメモ書きされており、グリフィスが毎日つけていた日記<sup>3</sup>の中にも、齋藤は登場する。

今回の報告は、この二つの資料を基にして、グリフィスと齋藤がどのような関係にあったのかを明らかにするものである。

<sup>1</sup> ニューヨークタイムズのサーチサイト <http://query.nytimes.com/search/site/search/> でグリフィスの名前を入力すると出てくる。ダウンロードもできる。

<sup>2</sup> ラトガース大学 Rutgers University のアレキサンダー図書館 Alexander Library が所蔵する、グリフィス・コレクション The William Elliot Griffis collection の中のもの。先般、従妹の松本かつらが同図書館から頂いたファイルを使用。

<sup>3</sup> 1872.1.23~1874.9.17の東京時代の日記。「W.E.Griffis' Journal」。化学史家の蔵原三雪氏が翻刻したもの(武蔵丘短期大学紀要第12巻2004年・第13巻2005年に掲載)を使用。

## 1 : グリフィスの齋藤修一郎にたいする評価

グリフィス・コレクションに次の写真が保存されている（左：表 右：裏に書かれた文字）。



この写真と一緒に手紙が送られたのかどうかは不明（カタログには存在していない）<sup>4</sup>。

To Rev. Dr. Wm. E. Griffis,  
With respect + (英語で&の意味) Compliments of  
Saito Shuichiro  
(Vice Minister of Japan in Korea) (鉛筆で追記か? : グリフィス文書整理者の文字か? 注記1)  
Seoul Corea, April '95  
One of my most promising students, born in the earthquake time of 1855 (グリフィス注記2)

親愛なる ドクターウイリアム・エリオット・グリフィス様へ  
齋藤修一郎より 贈呈する 1895年4月 朝鮮ソフルにて

注記1 : 朝鮮の日本人副大臣 : 整理したグリフィスの娘の注記?

注記2 : 私の将来有望な生徒たちの一人 1855年の地震が起きたその時に生まれた(1855年という地震が多い年に生まれた) : グリフィスの注記

●日本人副大臣とは? : 正確には「顧問」。この顧問制度は、日清戦争直前の1894(明治27)年7

<sup>4</sup> 写真のみ送るのは不自然。齋藤の現在の地位について記した齋藤の手紙が存在する可能性は大。差出人不明に分類されているかも。

月に日本政府が強要した朝鮮政府改革で、政府（議政府）を宮邸から切り離し、大臣を顧問が統制して日本の意のままに動かす制度。顧問といっても決定権を持った事実上の副大臣。だが韓国国王・王妃一族の激しい抵抗を受ける。日本の省にあたる各『部』が置かれ、その部毎の大臣には、日本人顧問が付けられ、顧問の承認がなければ大臣は何事も裁可できないこととした。齋藤修一郎は、内部（内務省）の顧問。この写真の半年後、1895年10月8日、三浦日本公使や公使館付き軍隊と壮士が朝鮮王妃を虐殺し日韓関係は深刻なものに（閔妃暗殺）。修一郎は事件の詳細報告のために10月17日に帰国。

●修一郎が生まれた年と地震：安政2年は大地震が頻発した年。修一郎が生まれたのは、安政2年7月12日（西暦1855年8月24日）。この八カ月前の安政元年11月4日と5日（西暦1854年12月23日と24日）に、わずか32時間の間隔をおいて、安政東海地震と安政南海地震が起きた（南海トラフ大地震）。地震の大きさは東海地震がマグニチュード8.4で南海地震は8.0。関東地方から四国にかけて、特に近畿地方に絶大な被害をもたらした。この地震のときには福井では城内の櫓・堀等大破、潰240、死者4の大被害をもたらしている。ということは修一郎の生まれた越前府中でも大きな被害はあったことであろう。そして修一郎が生まれて3ヵ月後の安政2年10月2日（西暦1855年11月11日）には江戸で安政江戸大地震が起きて大被害が生じた（福井では被害がない）。マグニチュード6.9の直下型地震。江戸市中の町人の死者は4200人余り。武家の死者を加えると1万人を超えると見られている。これも安政東海地震・南海地震の余震の一つと考えられている。つまり修一郎が生まれた年は、その8カ月前から3ヵ月後の1年余りに渡って全国で余震が続いたということ。1855年は「地震の多い年」であった。

グリフィスがわざわざ送られた写真の裏に「born in the earthquake time of 1855」と注記したということは、地震に並々ならぬ関心を払っていたグリフィス<sup>5</sup>に修一郎が学生時代に、「自分は地震が起きたまさにその時に生まれた」と語り、グリフィスに強い印象を与えていたからだと推察できる。しかし、修一郎が生まれた日に越前府中で地震があったという当時の記録（日記など）が出てこない限り、「地震が起きたそのとき」に生まれたとは断定できない。

## 2：齋藤修一郎とグリフィスの関わり（グリフィス東京日記による）

### ●グリフィスと修一郎との出会いはいつか？

・グリフィスは1872年2月28日（明治5年1月20日）から4日連続で、E.H.Houseのクラスを代講している。この時が確実な出会い。

※E.H.House：Edward Haward House 1836.10.5～1901.12.8 アメリカ人ジャーナリスト（ニューヨーク・トリビューン紙の東京特派員）。明治2年に来日。明治4年1月1日（1871年2月19日）～明治6年1月28日（1873年1月28日）まで大学南校—南校—東京一番中学で英語教師を務める。在学中に退任後もしばしばアメリカの新聞に寄稿し、日本の権利を侵害して憚らないイギリスを始めとした西洋諸国公使の行動を厳しく批判した。ハウスに批判された駐日アメリカ公使から日本政府に「ハウス解任」の圧力がかかり、日本政府はハウスが痛風で悩んでいたことを表向きの理

<sup>5</sup> グリフィスの日記にはしばしば地震の記録が現れる。めったに地震の起きないアメリカ東部地域に生まれ育ったグリフィスにとっては、日本に来たことは、地学の教科書で習った地震に実際に体験できる良い機会でもあったのかもしれない。

由にして辞職を認め、彼にアメリカで日本弁護の論陣を張るよう依頼されて一時帰国した。彼は奴隷廃止論者で、南北戦争のおりに志願して北軍に従軍したほどの平等論者である<sup>6</sup>。

※明治5年前半期の南校名簿など<sup>7</sup>によると、英語専攻クラスは1～4までである。『近代文学研究叢書5』のハウスの項のよると、ハウスはこのうちの1～3を教えていた。小村と齋藤は共に英1のクラス。グリフィスが南校に来てハウスのクラスを代講した時が二人の出会いと思われる。

※初来日した明治3年11月8日（1870年12月29日）以後グリフィスは、1871年1月3日～2月16日まで東京に滞在し、大学南校教頭のフルベッキの家に寄宿していた。この間に1週間（1月23日～30日）大学南校で病欠欠席の外国人教師の代講をしていた。この時すでにハウスも英語の講義をしていたので、グリフィスはハウスのクラスも代講した可能性がある<sup>8</sup>。ただし齋藤はこの時期にはまだアルファベットを知るのみであったので英16のクラス（全部で18組）だった<sup>9</sup>。この時期に齋藤がグリフィスに出会ったかどうかは不明。

## ●齋藤はグリフィスから何を教わったのか？

### ・グリフィス東京日記での授業関係の記述

1：1872年2月5日（明治4年12月27日） 南校に初出勤して化学薬品や器具のストックを点検。

Spent the morning in visiting the school, examining their stock of chemicals & apparatus,

2：他の教師の代講を行う。

1872年2月28日（明治5年1月20日） ハウスのクラス。

Taught Mr. House's class in school today.

1872年2月29日 ハウスのクラス。

Taught Mr. House's class as usual,

1872年3月1日 ハウスのクラス。

Took House's class as usual.

1872年3月2日。

Taught till 12.

1872年3月22日 メージャーのクラス。

Took Mr. Major's class in the afternoon.

1872年3月25日 ヴィーダーのクラス。

Took Dr. Veeder's class in Nanko,

1872年4月2日 メージャーのクラス。

Taught in Nanko school today, taking Mr. Major's class, he being sick.

<sup>6</sup> ハウスについては、『近代文学研究叢書5』（1957年刊 昭和女子大学近代文学研究室著）が最も詳しい。

<sup>7</sup> 「南校生徒名簿」（明治5年4～8月）。「南校生徒中公費生徒取調に付報告」（明治5年7月12日）。『中央大学史資料集第三集』1988年刊。

<sup>8</sup> 山下英一著『グリフィスと福井・増補改訂版』2013年刊の「グリフィスの生涯」p26による。山下氏によると「英人語学教師ローバーの組みなどを通訳づきで教えた」と。この時期の日記原本を読めば確認できるはず。

<sup>9</sup> 『懐旧談』p51による。「翌年の8・9月まで継続して次第と読書力も付いてきた所から、一年足らずの間に9の組まで昇級した」とあるので、明治4年9月（西暦1871年10月ごろ）には英9組であった。そして明治5年1月（西暦1872年2月ごろ）には英1の組に昇級していたのではないか。

1872年4月6日 ヴィーダーのクラス。

After dinner, taught Dr. Veeder's class 1 1/2- 3 1/2.

1872年4月18日 新しい教室を整える。

Chose and arranged new lecture room 10-11,

3 : グリフィスは、1872年4月19日(明治5年3月12日)から、専門の化学の講義を始めている。

1872年4月19日(明治5年3月12日) 専門の化学の講義を始め、十分に楽しむ。

Began teaching in Nan Ko today, and enjoyed it fully.

4 : 以後普通の授業があった日には詳しい記述はなく

Usual day at school, という記述が続く。

5 : 休んだ生徒たちに教えることもあった。1872年5月29日。

Busy day at school, drilled the boys at recess.

6 : 南校が解体されて、東京第一番中学に改組される際には、生徒を選ぶのに忙しかった。1872年6月7日。

Busy at school —rearranged the students for the month.

7 : 南校が解体される前の最後の夏休みの始まりの日、生徒・教職員一同で写真を撮る。

1872年7月19日(明治5年6月14日)。新学期は8月20日から始まる。

Holidays begin today. Passes issued, salary paid, school photograph taken. Veeder, Whymark off. Others to follow.

8 : テストを行った記述もある。

1872年9月4日(明治5年8月2日)。英1のクラスのテスト。ハウスとグリフィスによる。

Examination of 1<sup>st</sup> class today with House & myself.

1872年9月5日。英1のクラスのテスト。ヴィーダーによる。

Examination of 1<sup>st</sup> class today by Dr. Veeder.

1872年9月6日。英2のクラスのテスト。ハウスとグリフィスとヴィーダーによる。

Exam. Of 2<sup>nd</sup> class by Mr. House & myself. Exam. of 2<sup>nd</sup> class by Dr. Veeder.

1872年9月9日。英3のクラスのテスト。ハウスとグリフィスによる。

Morning—Examination by the House 3<sup>rd</sup> class. Afternoon—Examination by the W.E.G. 3<sup>rd</sup> class.

※おそらくこれが南校最後のテスト。グリフィスはハウスとヴィーダーと共に、英1～3のクラスを担当していたことがわかる。

※グリフィスは何の教科を担当していたか？ 英1のクラスを教えた教師は、フルベッキ・ハウス・グリフィス・ヴィーダーである。助教は、宇都宮・柳本・高橋の日本人<sup>10</sup>。南校および第一番中学の学科目は、英1のクラスの場合は、修身学・生理学・窮理学・化学・幾何学・代数・文典・地理学・歴史・作文・図画・体操である<sup>11</sup>。ハウスは文典・作文・読み方・歴史を教えた。ヴィーダーは明治11年10月まで英語・物理学・理学・法学・数学を教えていた教師で、窮理学(つまり物理学：助教が柳本)・

<sup>10</sup> 『東京帝国大学五十年史』1932年刊 上巻 p214~232 掲載の学科表が典拠。ハウスは文典・作文・読方・歴史を教える。

<sup>11</sup> 「第一大学区第一番中学教科順序取調に付伺」(『中央大学史資料集第三集』1988年刊)による。

幾何学・算術を教える。フルベッキは明治6年9月まで。語学と普通学。彼が担当したのは代数。グリフィスは修身学と生理学と地理学と化学（助教が宇都宮）、そして文学を教えていた<sup>12</sup>。図画が高橋。

9：東京一番中学の授業は1872年10月5日（明治5年9月2日）に始まる。この日の日記。

At school today, met the new classes, and gave out lessons 10-12 in the Yashiki with the 1<sup>st</sup> class students translating proverbs.

英1のクラスの生徒に課外授業として「ことわざ」の翻訳を教えた。

10：1872年10月6日の日記には、東京第一番中学となるとともに、新しいクラスが作られたとある。以後は学校の記述はほとんどない。

New classes admitted into Nan Ko today.

※おそらくこれが、英5～9のクラスを指しており、英1～4のクラスを上等中学、英5～8のクラスを下等中学、英9のクラスを予科としたことを指すものか。

11：1872年12月24日（明治5年11月24日）。英1のクラスの生徒にご褒美を与えた。

Gave prizes to 1<sup>st</sup> class today.

12：グリフィスの担当クラスは増えていたか？ 英1～4のクラスに。

1873年3月4日（明治6年3月4日）

Examination of 1<sup>st</sup> class in Chemistry.

1873年3月5日

Examination of 2<sup>nd</sup> class.

1873年3月10日

Examination of 3<sup>rd</sup> class.

1873年3月16日

Examination of 4<sup>th</sup> class.

13：同じくグリフィスの担当の教科が増えていた可能性。

1873（明治6）年4月11日の項に Corrected 3<sup>rd</sup> class composition, （英3クラスの作文を添削）という記述あり。

※これは今までこのクラスの語学を担当していたハウスが、1973年1月28日付で解雇となり、2月23日にアメリカに帰国したことに伴う措置で、残った三人で分担したか。ということは他の英1・2の語学や歴史もグリフィスの担当になった可能性がある。この時期ではないか、英1のクラスの齋藤らがグリフィスから直接英語をならったのは。

14：学校が1873（明治6）年4月12日に開成学校と改名改組された後は、学校についての詳しい記述はほとんど登場しない。Usual day in school. の記述が続く。

資料によるとグリフィスは<sup>13</sup>、法科の予科3年（一級）と2年（二級）のクラスの歴史を担当。さら

<sup>12</sup> 山下英一氏は「化学・生理学・地理学・修身学・文学」と書く（『グリフィスと福井』改訂版 p30）。典拠は『東京帝国大学五十年史』の上の資料である。

<sup>13</sup> グリフィスが開成学校でどの学科のどの教科を教えたかは確たる資料がまだみつからない。とりあえず『東京大学百年史』の通史1（1984年刊）中に引用された『文部省雑誌』明治6年7月24日第3号の時間割と、グリフィス日記に基づいて推定する。

に化学（理学）科の予科3年（一級）と2年（二級）と1年（三級）の語学と化学を担当。そして工学科の予科3年（一級）（担当学科不明）の計6クラス<sup>14</sup>。またそれぞれの学科には「翻訳」という教科もあったので、これも教えていた可能性は大。齋藤はこの時からグリフィスが退任する1874年7月までは法科予科3年である。

15：1874（明治7）年2月2日の項に

examinations begin in school. Prof. Summers in English and Logic, W.E.G in Hume's History of England. との記述あり。

※これだけではどのクラスのテストかは不明。法科予科3年（一級）の学科の英語には論理という項目がある。法科では予科1年（三級）で英国史、予科2年（二級）で古史（ゼネラルヒストリー オブ エンシント タイムズ）・近世史（ゼネラルヒストリー オブ モデルン タイムズ）と学び、予科3年（一級）で開化史（ヒストリー オブ シビライゼーション）を学ぶことになっているが、この教育課程は明治8年の段階のものであり、1874（明治7）年にはまだ整えられておらず、こうは定まっていなかったのかもしれない<sup>15</sup>。

16：1874（明治7）年2月10日

Examination of 1<sup>st</sup> class in chemistry 8-11. 理学（化学）科の予科3年（一級）のテストである。通常の講義は2月17日から始まっている。

17：講義の準備をした記事がある。有機化学の最初の講義の準備、そして実験の準備、砂糖についての講義の準備。さらに吹管（ガラス作りの）の準備。

1874（明治7年）2月25日

Prepared for 1<sup>st</sup> Lecture on Organic Chemistry 8-10. School 10-12. Prepared for experiments 1-4.

1874（明治7）年2月26日

2 hrs. in school. Expts. on sugar.

1874（明治7）年3月12日

Blowpipe analysis in the afternoon. 吹管の授業は4月26日、6月6日に行われている。

18：夜に生徒たちと過ごすこともあった。理学（化学）科の予科3年（一級）・予科1年（三級）と。

1874年3月20日

Evening, 1<sup>st</sup> Scientific Class spent evening with me.

1874年3月21日

Evening, 3<sup>rd</sup> Scientific class to evening entertainment.

19：グリフィスの最後のテストが行われる。

1874年6月19日、法科と化学科の予科3年にプレテスト。6月22日、法科予科3年のテスト。6月25日、化学科のテスト。7月6日、工学科予科3年（一級）のテスト。

・グリフィス東京日記での齋藤修一郎

1：1872年3月20日（明治5年2月12日） 南校時代

Busy all day. Headache. Afternoon, called Mistuoka at his house, met Saito & Mowri. との記

<sup>14</sup> グリフィス日記の1874年7月13日に内田写真館で生徒たちと写真を撮ったとの記述。「6クラス全員」とある。

<sup>15</sup> 国立国会図書館所蔵の『東京開成学校一覽』明治8年2月による。

述。三岡は福井藩元大参事でグリフィスが福井にいた当時親しく交流。1871年8月20日（明治4年7月5日）に集議院の一員となって東京に行き、1871年9月7日（明治4年7月23日）に東京府知事となる（～1872年8月18日・明治5年7月15日。グリフィスが知ったのは9月14日）<sup>16</sup>。この記事の当時は東京府知事。齋藤と毛利は福井藩関係者か？ 齋藤修一郎とは特定できない。

**2 : 1873年5月15日（明治6年5月15日） 開成学校となって以後**

Three students Hasegawa, Saito & Komura recommend to go abroad to study. との記述。3人の学生に海外留学を勧めている。長谷川芳之助（化学予科一級）、齋藤修一郎、小村寿太郎（共に法科予科一級）の可能性大。彼らはこの1年後公費での外国留学を行うことを文部省に建白している（5人組。残り二人は。安東清人と鳩山和夫）。海外留学運動のきっかけを作ったのがグリフィス。

**3 : 1873年9月1日（明治6年9月1日）**

Saito came at 8.30, staying till 10 o'clock, answering questions etc. Took dinner with me. との記述。齋藤が午前中に来てグリフィスが質問に答えた。昼食をグリフィスと共にしたというもの。

**4 : 1874年3月11日（明治7年3月11日）**

Evening, 1<sup>st</sup> & 2<sup>nd</sup> Legal Classes Kai Sei Gakko at our house, refreshments etc. との記述。開成学校法科の1stクラス（予科3年）と2ndクラス（予科2年）の生徒がグリフィスの家に夜遊びに来たというもの。齋藤は予科3年である。

**5 : 1874年5月24日（明治7年5月24日）**

Evening, long talk with Saito. との記述。すでにグリフィスが今学期で退任することが決まっていた段階のこと。何を話したのであろうか。ちょうど齋藤らが留学運動を開始したころのこと。

**6 : 1874年7月10日（明治7年7月10日） グリフィスの帰国直前のこと**

Morning, rode with Saito to Asakusa, great crowds present, buying anti thunder charms and rice offered to gods. との記述。朝方齋藤とともに浅草に行き（多分浅草寺）、雷よけのお守りと神々に備える米を買ったと。

**7 : 1874年7月12日（1874年7月12日）**

Evening, Bible Class. Kuhara, Ibi, Iriye, Saito, Miura. との記述。久原躬弦は化学（理）科予科3年。衣斐弦太郎（後に関谷清景）は工学予科3年（明治9年の文部省第二回留学生）。入江陳重（後に穂積）と三浦和夫（後に鳩山）は法科予科3年（入江は明治9年の文部省第二回留学生。三浦は明治8年の文部省第一回留学生）。最後まで熱心に通った生徒を挙げたか？ グリフィスは、3月15日以来、日曜日の夜に、聖書を講義していた。ほとんどが法科予科3年の生徒だとも記している。この日以後、3月22日、29日、4月12日、19日、5月2日、10日、17日、6月6日、28日、と都合10回開いている。7月12日が11回目の最終回。（なお福井の明新館での生徒に対しても、4月5日から都合11回の聖書講義を、これは日曜の午前に行っていた）。

※学校での正規の講義だけではなく、齋藤が小村らとともに、グリフィスに特別に目を掛けられていたことがわかる。だから1875（明治8）年8月15日に留学のためにニューヨークに着いた文部省第1回貸費留学生を代表して齋藤がグリフィスに手紙を書き、皆で会いに行ったということなのだろう。

<sup>16</sup> グリフィス福井日記による。